

同志社大学出身作家

～藤野可織 真山仁 有栖川有栖～

藤野可織

<略歴>

1980年、京都市に生まれる。
同志社中学校・高等学校卒業後、同志社大学文学部に進学。
同志社大学大学院美学および芸術学専攻博士課程前終了。
2006年、「いやしい鳥」で第103回文学界新人賞受賞。
2009年、「いけにえ」で第141回芥川龍之介賞候補。
2012年、「パトロネ」で第34回野間文芸新人賞候補。
2013年、「爪と目」で第149回芥川龍之介賞受賞。

<代表作>

「いやしい鳥」

デビュー作。文学界新人賞を受賞する。高校生の時に読んだ、「西洋美術史大全」から一つのヒントを得た、とのこと。そのほかの藤野作品においても、美術の分野から影響を受けることがある、という。また、主人公は院生の時に出会った「オーバードクター」から、思いついたらしい。書こうと思ったきっかけは「人間が鳥に変身するシーン」や「巨大な鳥が狭くて暗い廊下にぎゅうぎゅう詰めになった鳥」を描きたかったから。

(ストーリー) 非常勤講師の高木は、学生たちと一緒にいった飲み会で、おかしな男・トリウチ(堀内)と出会う。飲み会からの帰宅途中、酔っ払ってまともに歩けなくなったトリウチに絡まれてしまった高木は、トリウチを家に連れて帰り、看病してやることにする。高木の家に来て来たトリウチは、高木が飼っていたインコのピッピを食べてしまう。するとトリウチは、痛みながら鳥になってしまった。

「爪と目」

第141回芥川賞受賞。「二人称小説」。父親の不倫相手だった「あなた」は、母親の死をきっかけに「わたし」の家にやって来る。「あなた」は「わたし」に対して無関心で大人しくさせるためにスナック菓子を与え、家事も大したことはやろうとしなかった。「あなた」と「わたし」そして「父親」。互いに無関心な生活の中、「わたし」は突然「あなた」の目の中に自分の爪の破片を入れ「これでよく見えるようになった？」とたずねる。

真山仁

公式 HP <http://www.mayamajin.jp/>

<略歴>

1962年 大阪府生まれ
1987年 同志社大学政治学科卒業
同年4月 中部読売新聞（現・読売新聞中部支社）に入社
1989年11月 同社退職
1991年 フリーライターに。
2004年 「ハゲタカ」（ダイヤモンド社）でデビュー。

<代表作>

「ハゲタカ」2007年NHK土曜ドラマ「ハゲタカ」2月7日～3月24日（原作『ハゲタカ』『バイアウト』）

（粗筋）

ニューヨークの投資ファンド社長・鷺津政彦は、バブル崩壊後、不景気にあえぐ日本に戻り瀕死状態の企業を次々と買収する。敵対するファンドによる妨害や、買収先の社員からの反発を受けながらも、鷺津は斬新なプランで無慈悲に企業を買収漁っていく。都銀で不良債権処理を担当していたエリート行員の芝野健夫にとって鷺津とのビジネスは衝撃的で、自らの将来を変える決断に至る。一方、経営難に苦しむ日光の老舗ホテルの娘・松平貴子も、二人との出会いがきっかけで、自らの試練に立ち向かい始めた。（公式HPより）

「黙示」

農薬を散布していた一機のラジコンヘリが、小学生の集団に墜落した。高濃度の農薬を浴びた少年は意識不明の重体に。少年の父親の平井は、農薬の開発責任者だった。

事件の一部始終を目撃していた養蜂家でもあるカメラマンの代田は、テレビ番組で発言する。「農薬の恐怖は、放射能以上だと言っているんじゃないでしょうか」。使われていた農薬は、ネオニコチノイド。ミツバチの集団失踪現象の犯人とも言われている薬剤だ。

同じ頃、農水省キャリアの秋田一恵は大臣直轄のセクションに抜擢される。命じられた課題は、農産物輸出のビジネス戦略だったが…。

女性キャリア官僚、農薬メーカーの開発者、カメラマン。3人の理想と現実、矛盾と葛藤、そして「危険な正義」。それぞれの戦いが交錯し、思いもよらぬ結末が待ち受ける。（公式HPより）

有栖川有栖

<略歴>

1959年 大阪府生まれ。同志社大学法学部卒業。

1989年 「月光ゲーム」でデビュー。

1994年 専業作家となる。

2003年 「マレー鉄道の謎」で第56回日本推理作家協会賞受賞。

2008年 「女王国の城」で第8回本格ミステリ大賞小説部門受賞。

本格ミステリ大賞初代会長でもある。

火村英生に捧げる犯罪

2008年9月 文藝春秋より単行本発行

2011年6月10日 文庫化

<収録作品>

「長い影」

「鸚鵡返し」

「あるいは四風荘殺人事件」

「殺意と善意の顛末」

「偽りのペア」

「火村英生に捧げる犯罪」

「殺風景な部屋」

「雷雨の庭で」